

第六号

昭和五十四年九月一日発行

はまゆうと桜貝と海光る

わが故里

鶴沼を語る会



鶴沼



関東大震災を想起して

奥田直元

まえがき

大正十二年九月一日の関東大震災の時私は十七才でした。あれから半世紀がすぎ、その間にもいくつもの大きな地震がありました。その被害や恐ろしさは皆様よく御存知の事と思います。しかし地震は経験した者でなければ本当の恐ろしさや真実をお伝えできないと考えております。

鶺鴒沼に住んでいて、それを経験した者としてありのまゝを聞いていたただこうと思ひ拙いペンを取りました。話も断片的で記憶も少くあやふやなところもありますが、体験記として読んでいただき少しでもお役に立てましたら幸に存じております。

(一) 地震発生当時の我が家の状況

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、関東一円は震源地相模湾沖の激震をまともに受け湘南海岸一帯も甚大なる被害にあいました。

当時私は夏休みで鵜沼にいました。

ちょうど昼食の支度をしており私は十能で残り火を座敷の長火鉢に運んでおりました。突如、轟音とともに私は台所の土間にたゝきつけられたような気がし一瞬死ぬと思いました。

これは大地震だと直感し外えでようとしましたがすでに家は倒壊しいのちからがら戸のすき間から外え這い出しました。

余震は間断なく襲い轟音は果てることはありません。この日私の家には老婆と娘さんの2人が避暑のため来客していたことを思い出し、とって帰して家の中を探したところタンスの際にいたので急いで外えつれだし竹やぶまでつれ出す事ができました。

その頃やゝ平静となり家は倒壊していても杉の木に支えられ裏口から出入りできる場所を発見し自分の慌てぶりに苦笑しました。

次に、母が「火を消して」の声にふたゝびとってかえり火鉢や七輪、長火鉢の火を消しました。長火鉢の火は幸に鉄ピンの湯がかかり半ば

消えておりましたがこの火がふすまにでもついていたらとあとで考えゾツトしました。この間数分だったと思います。がむがむ中でした。

余震と轟音はひっきりなしに起っておりましたがさすが十七才の健康な肉体は空腹を要求し、ふたたび家の中にとつてかえし炊いた御飯と梅干を持って出てきてニギリメシを作つて食べました。さすが母や客人二人はノドに通らないようでした。

その時水が何よりも大切であると感じたのです。幸い私の家の井戸は円型土管づくりであつたので石の組合せの井戸が破壊されても残りしましたが井戸水がなかつたらと考えるとやはり大変な困難だと思つております。

以上は、地震発生当時の私の家の状況ですが、私の幸と思つた事は、第一に家が全壊しなかつたこと、第二に火災が発生しなかつたこと、第三に井戸水が使えたことの三点でした。

(二) 鵜沼の被害状況

私は、農村地帯にあつた私の家の状況はまずこれ以上の被害はまずあるまいとたしかめてから隣り近所、別荘地の家々の被災状況

を見てまわりましたがほとんど全壊又は半壊しており、しかも最も大切な井戸が使用不可能となっておりました。しかし昼飯時であったにもか、わらず一件の火災すら発生しなかつた事はまこと不幸中の幸でありました。次に私は、親しくしていた友人が、砂丘の上の別荘地にいたのを思い出し、きつと水がなくなっていると考えバケツに二個両手に持ち走つて飛んでいったところ果して友人の家は倒壊しており井戸も使えなくなつており大変喜ばれました。しかし、そこに行く途中の道は三十センチメートルも地割れをし小高い松林に立つていました二階家は真さかさまにひっくりかえつているあり様は全く地震の恐ろしさそのものでした。地震発生と同時に海岸に津波が押し寄せ倒壊をしたり押し流されまた漁船が小松林を越えて押し流されているのを見て地震とともに津波の恐ろしさをしみじみと感じました。こうして恐怖の中で一夜を送らねばならず、そうかと言って家の中には入れず庭の樹木の下で寝る事となつたのですが

真暗い野天で誰一人満足に寝る事ができませんでした。

私は、遠く夜空を眺め、右の横浜方面、左の東京方面の空が赤くなってくるのを眺め父や兄の安否を気づかいつ、不安の一夜をまんじりともしませんでした。

(三)、翌二日目の状況

不安の一夜を明かし二日目を迎えました。が今後どうすべきかの見通しは全くただず、母と私はまずお客様の安否を東京の自宅に知らせ、東京にいる父や兄の消息を一刻も早く知らねばならなかったのですが、うていそれを実施できる情勢ではなく、余震の続く中でただ右往左往しているばかりでした。

流言蜚語

時間が経つにつれてどこから伝わってくるかもしれないのに不安な情報が伝わって来ました。当時はラジオやもちろんテレビもありませんから人の口コミだったのでしょうかが朝鮮人が大挙して襲って来るとゆうのです。それと、それに対応する手段として緊急会議を開き、適当な組を

組織して自衛警戒に当たること、なり、各自武器としてカシの棒、竹、木刀などを持ち警戒に当りました。

多数の朝鮮人が六郷川を押し渡りすぐ攻めてくるなどまことしやかな情報もあり、地震の恐怖の上に恐怖が重つてた、おそれおののくばかりでした。

やがて夜が来てふたたび野宿する事になりましたが男はすべて夜警に当り襲撃に備えることとなり一晩中巡回してまわりました。したが何事もなくホツトしました。

(四) 三日目を迎えて

私の自宅は当時東京牛込に父と兄と一緒に住んでおりましたが夏休みを利用して鵜沼の母のところに来ていたのですが九月二日に東京に帰る予定でした。ところが突如としてこのような大地震に見舞れ、父や兄のもとに帰ることができず安否もたしかめられませんでしたので、このままでは不安がつるばかりと決心し夜明け前に出発したのでした。

(四) 四日目を迎えて東京の状況

私は朝早く鵜沼を出て東京に着いたのは夜九時半でした。そして父や兄の無事の姿をみて涙にくれました。

途中歩いたり貨車に乗せてもらったり自警団に何回ともなく尋問を受けたりしました。そして倒壊した家屋やころがっている死骸をみてたゞたゞ地震の恐ろしさにふるえあがったのです。

東京に着いて友人の安否を確かめたく本所から浅草にでかけそこでも悲惨な情景をいくつもみたのでした。

(五) 結論

大地震が起きたらどうするか、私の経験のみ申し上げます。

(イ) しっかりした机、タンス等に身を寄せる。

(ロ) 外部への脱出はよく注意して行い落下物等を防ぐ。

(ハ) 火元は必ず消す。家族全員に常時より徹底しておく。

(ニ) 避難。家財道具など持出さない。非常袋を用意しておく。

非常袋の中身（缶詰、携帯食、救急薬品、飲料水、懐中電灯、ロープ、重要書類）

避難場所はあらかじめきめておき家族全員で打合せしておく。

附記 藤沢町の被害状況

全戸数	三、七四〇	死傷者数	
家屋全壊	一、五二八	圧死者	一〇四
半壊	一、七〇二	負傷死亡者	一四
全焼	二	負傷者	一一九
流出	一〇		
			以上

断片的に記述致しましたが具体的の話は座談会の時致したいと思っております。

奥田

鵠沼碑文集（其ノ四）

伊藤節堂

- 一・名称 帆足可成の句碑
- 二・所在 鵠沼藤が谷三ノ一〇ノ一九 賀来神社境内
- 三・建立 明治二十七年三月
- 四・碑面 こがらしの落行くあとや水の月 可成
- 五・碑陰 君姓は帆足、名は信、松岡庵可成は其の別号なり、旧長府藩士、仕えて陸軍一等軍吏正六位勲五等に至る、性風流にして俳詣を嗜む、甚だ鵠沼の風景を愛し、遂に寓を本土に移す、今日の繁栄有るは蓋し君が力居多ければなり、明治三十六年三月二十五日病没す、齒五十有六、この頃友人伊東将行等相謀り、將に其の秀句を

貞珉に らんとして余に揮毫を乞う、乃ち其の 由を書す

明治三十七年三月

三昧菴主人識

六・備考 高さ一七五^{cm} 巾九五^{cm}

注 齒^ニ 齡よわい

(せん) ^ニ ほる

貞珉(ていみん) ^ニ 石碑

由(ゆう) ^ニ 由来

鵠沼碑文集(其ノ五)

- 一・名称 鵠沼海岸別荘地開発記念碑
- 二・所在 鵠沼藤ヶ谷三ノ一〇ノ一九賀来神社境内
- 三・建立 大正九年一二月
- 四・碑面(篆額) 鵠沼海岸別荘地開発記念碑

(碑 文)

鵠沼海岸一帯の地は往昔底上ヶ原と称え、鵠沼は其の東南隅に在り、左は片瀬をなし右は辻堂をなす、南すれば則ち積水天を涵し浩蕩涯なく、伊豆大島三浦半島其の間に隠見す、西すれば則ち 芙蓉高く天際に立し、箱根足柄雨降の諸山其の左右に環列す、明治十九年武州川越の人伊東将行偶 此の地に來り、俳祖移刻、俯仰四顧しておもえく、郊外生活の好適地なりと、遂に住を移す、三觜直吉と協力して鵠沼館を創設し、以て士女遊涉の便に供せり、翌二十年今福元穎・三觜八郎右衛門・金子小左衛門・田中平八・斉藤六左衛門等相謀り、武相倶楽部を建設せり、将行また部員となり、専ら遊客招致の策を講じて、共に未だ其の績を挙ぐるに到らず、将行敢て屈せず二十二年中野武管・中島行孝・伊藤幹一と海岸の開発に従事せり、

道路を 關き松樹を 種え以て屋宇と園庭を作るに便す、是に於て
か往昔、汀沙漠々として風塵面を払うの域、今更りて一望曠觀、風
光明媚の佳境となり、貴紳富豪の別邸を構え、 別墅を設くる者、年
々其の数を増加せり、蜂須賀茂承・益田孝・藤堂高紹・久松定謨・
馬越恭平・高瀬三郎・郷誠之助・広岡助五郎・山口寅之輔・佐藤長
四郎・吉田嘉助・宮崎寛愛・千葉恒次郎・小田柿捨次郎・田中銀之
助を其の重なる者となす如し、将行益々奮励し、二十五年夏に一旅
館を嘗み東家という、嘗みてこれを築き、築きてこれを拡ぐ、楼觀
は精工巨麗にして靡らず、館皆松を還らし、池を造り水を蓄え、 清
洒掬すべし、前面渚を隔てて江の島に臨む。呼びて其の富を磨かん
と欲す、海山眺望の勝此の館の如きは

多く其の比を見ず、況んや室

清く、魚美く、歡待切に宜し、此の地の発展に伴い其の繁盛日に極まる、寺尾亨数此の地に來遊して、頗る其の蒼桑改觀の状を詳かにす、毎に人に語りて曰く、鵠沼の今日あるは蓋し亦、將行の積日累勞の致すところ、其の功豈残すべけんやと、信に其のいうや然り、將行今年七月二十九日病没せり、享年七十有五、孫將治其の家を継ぎ、族長谷川欽一其の業を承ぐ、施設渾て故の如し、此の地の有志、其の功を嘉尚し、胥に諮りて碑を樹て、此の地の開發を記念し、兼て此を不朽に伝えんと欲す、記を余に索む、余深く此の拳を讃む、依つて其の概を録し、且つ係わるに銘を以てす

鵠沼の浜の開發は維新なり、

翠嵐遠望し、碧波近接す、

冬宜しく夏宜し、宅遊可なり、

湘南に勝多けれど勝中の勝なり

大正九年庚申十二月

頭山 滿 題字
牧野 隨吉 撰又書

五・碑陰

藤沢町長 金子角之助

發起人

長谷川多嘉

有 萩原 輝

加藤徳右卫門

志 高松 良夫

左近辰太郎

者 福田 良平

齊藤正五郎

関根芳太郎

注

芙蓉峰、富士の異称 關「ひらく

種「うる 別墅（べっしょ）「別荘 清酒（しよ

うしゃ）「瀟洒 美「うまし 蒼桑「滄桑

桑田変じて滄海となるような大変化

每「つねに 信「まことに 渾「すべて

胥谿「ともにはかる 索「もとむ 銘「

金石などに刻み、来歴を述べ、功績をたゝえる文

震
災
の
座
談
会
の
メ
モ

藤 沢 市 鵜 沼 海 岸 二 丁 目 一 〇 番 三 四 号

藤 沢 市 立 鵜 沼 公 民 館 内

鵜 沼 を 語 る 会 発 行

電 話 (36) 七 四 三 一